

北里研究所 名誉理事長

おおむら さとし
大村 智さん



学生時代はスキー競技に没頭し、いつも腹ぺこだった

高校からスキーに熱中、家では農作業

夜間高校の教師になるが、昼は大学院に

二足のわらじ、週末は泊まり込みで実験

「振り返ると、いつも並行して2つのことに取り組んできた」と、大村さんは話す。子供のころは勉強と農作業の両立を求められ、高校教師の職を得てからは働きながら大学院に通った。そして研究者として国際舞台で活躍すると同時に、北里研究所の再建と大

学経営に腕をふるった。

昭和10年(1935年)に山梨県韭崎市の農家の長男として生まれました。父は青年団の代表を務めるなど村の顔役のような存在で、跡取り息子の私には農作業を徹底して仕込みました。小学生のころから朝は明るくなるとすぐ起きられ、学校のかばんを畑の隅に置いて働きました。コメ作りと養蚕を手伝いながら、人間とはこうあらねばならないと父の哲学を聞

いて育ちました。中学、高校ではスポーツに夢中になりました。初めはサッカー、次にスキーの長距離(クロスカン トリー)です。スキーは高校2年から始めて、3年の時と大学4年間は毎年、山梨県代表に選ばれるほど強かった。父は農作業を免除してくれはしませんでした。子供がやりたいと思うことは反対せ

ずやらせてくれました。農作業は計画的な仕事です。いつ何をすべきか、時機を逸することはできません。作業計画が大事なのは研究者も同じです。スポーツからは自分より高いレベルの人たちと競うことの大切さを知りました。全国大会に出場しても北海道や新潟の選手にはなかなか勝てません。どこが違うのか悩んでいたのですが、全国

自分なりに受験勉強をして、山梨大の学芸学部自然科学科に受けました。先生方からは「体育ではなかったのか」と言われました。スキー競技の実績から体育で受ければ確実だろうと思われていたわけです。学業の成績はよくなかったのですが、理数系はそれなりに点がとれたため、得意意識がありました。

それで池上にあった自宅に一升瓶を持って何度もお邪魔し、相談に乗っていただきました。先生は「何事にも正々堂々とあたれ、こそこそするな」などと、いつも励ましてくれました。

から選手を集めた強化合宿に参加し、練習をとにもするうちに私の技量も向上していきました。スキーに明け暮れ、大学進学は眼中になかったが、ある日、父から言われる。「勉強する気があるなら大学に行かせてやる」。級友に進路希望を尋ねると山梨大学と言われ、初めてその存在を知った。

話した。話し下手でしたし、山梨の方言を笑われるのがいやで、話すのが怖くなりました。また、工業高校の生徒たちは昼間に働いて、手に油污れをつけたまま、夜は鉛筆を握って勉強するのです。その姿を見て、自分は怠けていたのだ。もっと勉強したいと痛切に感じました。

そんな時に心の支えになってくれたのが安達禎先生でした。終戦まで旅順工科大学の学長を務め、戦後に新制の山梨大の学長になった人です。東京から優秀な若手教授陣を招いて大学の基礎を築きま

た。在学中に理科大創立80周年の行事があり、ある教授が私を在学生総代に推薦してくれました。土日に大学へ出てきて実験する感心なやつだと映ったらしい。確かに私は金曜の夜に寝袋を持ち込んで泊まりがけで実験をしていました。しかし、二足のわらじで、そうするしかなかったのです。

そのころ弟が東京大学へ進学し、学費も出していました。給料をもらうと即席ラーメンを1箱買って食いつなぐような生活で、結婚したときに妻からは半病人のように見えたと言われました。

研究を経営しよう

②

(聞き手は編集委員 滝順一)